



喜多登

厄年の御祈禱

古来、年が改まると一歳年を重ねた事から、新年に厄年となる者は厄除けの御祈禱を受けました。この二月は旧暦でいえば一月に当たる事から、梅の花咲くこの時期に厄除け祈禱をお受けになられる方も多くございます。

厄除け御祈禱は左表の年回りに、災厄が訪れないようにと祈る御祈禱で、一月と二月の時期にお受けになられるのが吉とされています。

当神社での御祈禱はご予約制ですので、事前にお電話等でご予約下さい。(初穂料五千元)

- 御本社(神山町) 〇六二六三六一二八八七
- 御旅社(茶屋町) 〇六二六三七二一五八六

男 性		
前厄	本厄	後厄
平成 6年生(庚) 24歳(小厄)	平成 5年生(酉) 25歳(中厄)	平成 4年生(申) 26歳(小厄)
昭和 52年生(巳) 41歳(中厄)	昭和 51年生(辰) 42歳(大厄)	昭和 50年生(卯) 43歳(中厄)
昭和 33年生(庚) 60歳(小厄)	昭和 32年生(酉) 61歳(中厄)	昭和 31年生(申) 62歳(小厄)
女 性		
前厄	本厄	後厄
平成 12年生(庚) 18歳(小厄)	平成 11年生(卯) 19歳(中厄)	平成 10年生(寅) 20歳(小厄)
昭和 61年生(寅) 32歳(中厄)	昭和 60年生(丑) 33歳(大厄)	昭和 59年生(子) 34歳(中厄)
昭和 57年生(庚) 36歳(小厄)	昭和 56年生(酉) 37歳(中厄)	昭和 55年生(申) 38歳(小厄)
昭和 33年生(庚) 60歳(小厄)	昭和 32年生(酉) 61歳(中厄)	昭和 31年生(申) 62歳(小厄)

※厄年の年齢は数え年です。
※紫 〓 大厄、黄色 〓 中厄、白 〓 小厄

菜種守の授子

江戸時代の俳人、与謝蕪村が「菜の花や月は東に日は西に」と詠った梅田茶屋町ゆかりの菜の花、また、天神さまの御霊をお宥ね(お菜種)し、年経るごとに天神さまが学徳の神さまへと移ろう縁にもなったという菜の花。菜の花は人々の心を和ませ、丸くするというチカラがあるといわれます。

そうした故実に由来して、茶屋町の御旅社では「菜種守(なだねまもり)」を二月二十五日から四月初旬頃までの期間限定で授与いたしております。イライラを鎮め、荒む心を宥め、気持ちるを明るくする事を祈念した開運の御守です。菜の花の咲く時期のみの授与です。

小堀遠州の大阪屋敷

戦国時代の大名であり、茶人、作家として知られる小堀遠州こと小堀政一。「きれいさび」の創始者として現代、その価値を再評価する動きもあります。

その小堀遠州は大坂城落城後の元和三年(一六一七)に、河内国奉行を兼任する事になり、屋敷を天満南木幡町に構えたと伝えられています。今年はそのからちようど四百年になります。

この天満南木幡町の位置については、諸説ありますが、元禄四年(一六九一)に描かれた『新撰増補大坂大絵図』に当宮からまっすぐ南にいったところに「小堀大膳」と書かれた場所があり、一八一年後の明治五年(一八七二)に描かれた『大阪市中区區界改正繪圖』には同場所が「砂原屋敷」と書かれており、この砂原屋敷が小堀大膳と書かれた区域とほぼ重なる事から、この砂原屋敷が小堀遠州屋敷跡であった事に間違いはなさそうです。

その場所は当宮の氏地の最南端でもある現在の西天満六丁目一番地あたりと考えられ、この場所には名物にもなっていた、閉店するするとずつと看板を出されていた「靴のオットー」が一年前の二月二十日まであり、この靴のオットーのあったあたりが小堀屋敷の最有力地ではないかと思われまます。小堀遠州も四百年近く後に自分の屋敷跡が閉店セールの名所になっているとは夢にも思わなかったでしょうね。

この小堀遠州ですが、大阪小堀屋敷が造営されたのと、ほぼ同年代に、京都の桂離宮の造営にも携わったと伝えられており、恐らくこの大阪の小堀屋敷も相当に粋なものであったのかもしれない。

四百年の月日を経て、今では面影もありませんが、今も昔もこの地は名所になる気運のある土地であったのかもしれないね。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀 知

